

若者

## 「水泳と私」

柴田 雅 秀\*

盛夏のどうしようもなく暑い日には、プールで、海で、あるいは清流で水と戯れるのは、とても気持ちいいものです。最近は大都市近郊ではプールも海も冷を取りにくる人々で一杯で、気軽にスイスイというわけには行かないようですが、それでも夏と水泳は切り離せないものでしょう。私も高校の時などは、夏休みになると近くの海へよく泳ぎに行ったものです。沖に立ててある飛込み台（海面上 1.5 m 程の鉄塔）で飛込みの技を競い合ったり、さらに沖に浮かぶ魚獲のための浮標まで競走したりしました。私がこれから話したいと思うのは、そのようなレジャーとしての水泳ではなくて、スポーツ、特にクラブ活動としての水泳についてです。両者は必ずしも明快に分けられないかも知れないけど、私は、レジャーは楽しく泳ぐのが第一、つまり「遊泳」、それに反して、スポーツとしての水泳はより速く泳ぐのが第一、つまり「競泳」だと思っています。

こう書いてくると皆さんは、私が、水泳がたいそう得意で泳ぎに自信があるから大学で水泳部に入ったのだろうと想像されるかも知れませんが、実は、それが全くそうではなくて、プールで泳ぐのは入部したその時が初めてという有様だったのです。しかし先に述べたように、一応海ではよく泳いでいましたから、多少の自信はありました。（今から思うと、泳いでいたというにはおこがましい気もしますが）折りしも日本水泳界はどん底状態で、僅かに青木まゆみや田口信教などが活躍していましたが、全体としては遠く世界水泳界に遅れをとっていました。（これは現在もなお、深刻な問題です。）世界に通用する新戦力を、日本中が待ち望んでいたのです。そんな状況の中で、私がある大きな

企みを持って入部を決意したとしても可笑しくはないでしょう。すなわち、「我こそが日本水泳界の救世主！ 天より選ばれたる者！ 時は熟した！ いざ！！」と、豪放磊落、大胆不敵と言えど立派だが、要するに世間知らずの恐いものなしで無知なるが故に持ち得た自惚れでありました。今から考えると、あまりの自惚れに呆れ返って声も出ない感がありますが、その時は、新地に及んで事を為すに目標がでかいに何をや憚らんという心境で、真剣だったのです。

しかし、その自惚れがいかにもいい加減かを知らされる迄にはそう長くはかかりませんでした。それは、水泳の世界のほんの切れっ端の現実を与えられるだけでよかったのでした。つまり、正確に距離の判っているプールを、ストップウォッチ片手に一度、たった一度泳いでみるだけでよかったのでした。

始めてプールで泳がされた時の記憶は、今でも鮮明に残ってます。そう、それは泳いだというよりも泳がされたという形容がピッタリくる辛い苦しい思い出です。およそ何に於いてもそうだが、見るとやるとは大違いで、見ただけで判断して高を括っていると、とんでもない破目に陥ることになるろう、という言葉 皆さんに慎んで贈呈したい。この時、私は「遊泳」と「競泳」の違いを骨身に滲みて感じました。大学1年の4月中頃のことでした。

「取敢えず 400 m 泳いでみるか。」と言われた時、私は水が冷たそうなのにちょっとたじろぎはしたが、満々たるファイトをもって答えたのでした。種目はそれ以外の型では泳げないという必然的理由でもって平泳ぎでした。が、水泳用語で指し示すところの breast stroke とは当然、掛け離れたものであったらと思います。25mの壁をターンしたあたりから、私は予想と大分勝手が違うのに戸惑い始めました。海であんなに軽かった自分の身体が重く押し掛かって

\*柴田雅秀 (Masahide SHIBATA), 大阪大学, 大学院, 工学研究科, 環境専攻, 博士課程前期 2年, 橋本研究室

きて前へ進むなんてことよりも、先ず身体を沈まさないようにするために大部分の力を注がなければならなかったからです。(身体の中で最も重い頭部を常に水面上に出して泳いでいたから当然のことです。)次の25m、私は渾身の力を込めて浮かすために、かつ進むために努力しました。そして、50m泳いで出発点に帰った時、ほとんど力が残ってませんでした。あとの350mは語るも無惨な物語りです。とても長く感じました。(実際には10分程であったでしょう。)手足は寒さと疲労でだるく痺れており、私の叱咤激励にも耳を貸さないようでした。それでもプールの底を歩くような格好で弱々しく泳いでいるのは、元気な時の慣性が残っていて手足が勝手に動いているとしか私には思えませんでした。途中、何度も岡の上から「もういい。上がれ。」という声が聞えるのを期待しましたが、いつも空しい期待でした。一方、心の奥底で、私は引っ提げてきた夢が豪快に音を立てて崩れ去るのを感じていました。それでも何とか泳ぎ終わった後、激しい嘔吐に襲われながら、私は自分自身に対する恥かしさと悲しさとやり場のない噴瀧が湧いてきて仕方がありませんでした。が、しばらくすると、あまりに決定的な敗北のために、却って気が楽になり、一攫千金を夢みた自分の愚かさが可笑しくさえありました。最後に、その日の晩飯がとてもうまかったことを

付け加えておきます。

そんな苦しいスタートから4年間、私は改めて水泳の難しさを知ったような気がします。水泳は一見至極単純な動作のくり返しです。それは歩行と類似しています。普段、誰も歩くことを難しいとは感じないでしょう。それは人々が地上に住んで、生まれて此の方、歩くことに慣れ親んでいるという理由によってであります。だから水泳も、一番の上達法はより多く慣れ親しむことだと思います。さらに、歩行においても人々の歩き方が異なるように、水泳においても慣れ親しむだけでは必ずしも皆が皆、速く泳げるようになるわけではありません。水泳は単純な動作のくり返しだから、複雑な動きを持つサッカーや野球などと比べて簡単であると思うのは誤まりです。単純なくり返しだからこそ、その単純さの中には比類なき正確さが不可欠なのです。これを称してある人が、「水泳はエンジンの内側のように磨き上げられなくてはいけない。」と言ったが正にその通りなのです。またエンジンの内部が外からは見えないのと同様に、水泳においても比類なき正確さが発揮されるのは主に水中であり、地上からは隠れた所であるという点でも両者は似通っています。

以上、勝手気ままに水泳についての私の思い出、考えを述べてきましたが、最後に、水泳をしてよかった、と今思っています。